943

明治十九年九月十七日出版御免

相極翻恨
思靈相

時樣畫眉
分八字

松竹梅

頃い永録未の年所ハ本郷追分ゑ
久兵衛とりハ八百屋あり家富栄
暮せ
ど不幸
み て妻
よりれ一人
娘のお七と
て今年二
八の春を迎へ

お杉

ゑ と思へども程よき
ぐれい今日
と過ぎ明
日となれ
其年も
八月廿五日ハ
湯島天満宮
の例祭なれバ八百屋久兵衛

お七

愛しこ大ゝこゝ
ゝ
ゝ

身をもみうる意風のこんぜ
迷ひ種とあるとハ後ゑ
そ思ひきゝれ
けるゝて其
日も黄昏告
る鐘の音と
とゝもゝね
出ぬと伴
ひ我家へたゝりえり
けるその夜も更れゝそれ
〜聞ゝ入りしゝどもハ昼の
程大満宮の社内ゝ
△知らさんば
迚も及ぶぬ意
ゝりと我
身で思ひゝ
△あきらめんと
止れとも目先へ
俳の残りてあこ
がれ〜い秋
の夜水と
絶もゆ〜
ゝ
ゝ
ゝ

是非あく我ら旦那寺
ある駒込吉祥寺へ立
退んとお杉お七と
伴ひて旦那寺ふ至
り方丈へ志ゐぐの
事をたのみこしらば
和尚も心よゝうけ
ゲひしらば久兵エ
ハ大ひに悦び
けるお七
長老の傍
ふさしこゝろ
若衆を〇

〇見るふ
豊図ん此八月天神の境内
ふて見染し意人ゆ
えつとあ出ウ紅葉
日ウ日まぐゆき風情ウ
お七ら見てめくる吉三と
いふを御旗本小森
ゆゑうとふ方の御
次男ゆく吉祥寺
ハ代々の旦家ゆく
を以て學問修行
のさめ今の小性
ありしゲたの

性来和尚
山の僧徒
愛せる
吉三郎
倉丸
鍬
小性
吉三郎は異り
面ま
きえ
ぎまの荒
吉四郎
の関の戸
さしとふ
きき釋教
掟最
中とそ
より文
弥八是

いろこの
てこの程
ろ
色ごと動
吉三郎
悔
お七と恨
晴さんと心
れこの吉祥寺
立派なる葬式の来
みてその父母の歎き

大声上げて墓を
あざき盗賊
ありとと
和尚さの声を
聞こゆるとうぬ
事ありとて
詮議あせし
お吉三の衣服
の余り色
よき衣と身ふまと
せ其侭棺おむ
納めて埋葬せしを
文弥い夜更ふ是を掘
小八と言者と言合せ衣と剥とり
賣代ゆして酒食とすれ
此罪とお吉三ま負せ
と吉三の聞
ま忍び入り
吉三衣類
ぬり

置抜足つつ逃去りんとせ
折しもお七い吉三ロ部屋ふ忍んと
たりしまは有様と見ま
りも胆の潰ふ驚けと何し
ま明の朝庫裏ま来ふ
久兵エ
お七
の上まられ
ふを不審のと
ありとて終
ま罪人ま
隠ちんとせ
しとゆか
七八其の
夜
のと
を
つ
和尚

小八

土左エ門

老若男女うちまじりて市中取締の役人籠屋軍蔵組子
松竹梅
ようり引
ゆるし縄と掛り法度を犯せし罪人
牢の上刑を行べしと言渡す
●小八文吹ち悪計をなす人牢の上無実の罪ふ陷
ちきり

便り失ふ浮世の中と思ひこがれて居たる処ろの武兵士い霊まのつゝかゝと引出し日頃の意趣とうえさんと已ガ友あるゝ小八をくらひ悪ごくゝを
お七吉三ご意しきすゝ
あゝけるまお七吉三ご意しきすゝ
竊ふ我ら家を忍び出ゞらふりみくゝる大鼓を目ゞけて昇りて今小八
殿の言ゝ通ふ山太鼓を打ときい守り厳しき木戸ゝも明き吉三こんゝ逢るれい此後こがれて死んより逢て死まゝあると手ひと弱げふ敷ふ上思ひのまゝふ打鳴せいとゝ事有と木戸ゝも忽ち開きて

其時お七と救ひん
とて十三才なるを一申立るのあり
けるゑ先年お七が七才のとき
松竹梅と書一額を湯島天神へ納め㊀

㊀〜と武兵エハ持来りその年より
繰るときい十六才なりとの
△終ふお七吉三と婚姻ゆさ
〜め久兵エハ
ら〜隠居とな
り多くの
孫とま
ケ家
とみめ
て
春を
ゆむ
久へ
け

の高人ゆて死罪ま
極りこうり〜ゞ
久兵エの抱
の鳥の
者傳吉
の為ず小八
武兵エの仕業
と判然せ〜
故お七吉三のあり
もこち放免とあり〜れい
久兵エの悦ひ大〜さる〜も
直ゞ吉祥寺方丈へも此事
を告けれい方丈も悦ひ限りなく〜

明治十九年八月廿五日御届
編輯兼出版人　浅草区南元町十二番地　牧金之助
定價六錢